

中国都市部中学生の学校忌避感を抑制する要因に関する研究

翟 宇 華*

本研究の目的は、中国の中学生における欠席願望の実態を調べ、登校理由、欠席理由、学校環境適応感など学校生活の各側面から学校忌避感に及ぼす影響を検討することである。中国の上海市、北京市、新郷市と蘭州市 4 都市の普通中学校の中学生（男子 628 名、女子 589 名、不明 13 名）を対象に、質問紙法による調査を行った。欠席願望を調べた結果、何らかの程度で学校を欠席したいと考えている生徒は半数以上存在していることが確認された。一方で、生徒の年間欠席状況について教師にアンケートした結果、4 つの学校ではいずれも不登校の生徒がいないと報告された。中国都市部の中学生は欠席願望を持っていても、不登校に陥らず続けて登校していることが分かった。さらに、中学生の学校忌避感を抑制する要因として、教師関係への適応は友人関係への適応以上に作用していることが明らかになった。

キーワード：中国の中学生、欠席願望、学校忌避感、教師適応

問題と目的

文部科学省の学校基本調査では、平成 15 年度の不登校の児童生徒数は 126,226 名であり、特に、中学生の不登校者数は 102,149 名に達し、小学校に比べ不登校の深刻さが際立っている。不登校の問題は今では教育問題にとどまらず、社会問題として取り上げられることが増加している。

日本では、学校に行けない子どもたちの存在は 1960 年前後から注目され始め、学校に行けないあるいは行かない状態をめぐっては、これまで、学校恐怖症、学校嫌い、登校拒否など、さまざまな用語が用いられてきた。1989 年に発足した文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」が、「登校拒否はどの子にも起こりうるものである」という考えを打ち出して以来、現在は「不登校」という用語がより広範な人々の間で多く用いられるようになり、定着している（保坂, 2000; 伊藤, 2002）。

不登校に関する定義や概念は多岐にわたり、まだ十分な一致がみられないが、ここでは、文部科学省の学校基本調査で使用されている次の定義、「不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあることをいう。ただし、病気や経済的な理由によるものを除く」を基準とする。年間 30 日以上長期欠席者は不登校者と見なす。

不登校の問題の根は限られた生徒にだけ当てはまる固有の問題だけではなく、広く一般児童・生徒にも共通した要因に根ざしていることが示されている（本間, 2000; 森田, 1991）。不登校の原因について、今までにさまざまな議論がなされてきており、「本人の要因」、「家庭の要因」、「学校の要因」、「社会文化的要因」など複雑な要因が絡み合っていると考えられている（保坂, 2000; 稲村, 1994; 森田, 1991）。また、不登校の増加と多様化の背景には、個人の自由を尊重し、さまざまな生き方を最大限に認めようという現代社会の風潮があり、学校に行かなければならないといった義務感や学校へ行かないことに対する心理的負担感が薄れてきている傾向も指摘されている。適応指導教室、フリースクール、サポート校などさまざまな受け皿を整備することが行政的にも推奨されている。かつて、知識が提供される貴重な場所であった学校そのものが聖性を喪失し、モラル低下と私事化現象が進んでいる今日、学校によほどの魅力がない限り、情報化社会に生きる現代の子どもたちを学校に引き止めておくことは難しくなっているかもしれないと伊藤（2001）が指摘している。

日本で「不登校」に関する研究が盛んに行われてきた一方、欠席に至らないが、登校回避感情を抱いている「不登校のグレーゾーン」に対する研究もいくつかみられる。森田（1991）が実施した不登校の実態調査によると、「学校に行くのが嫌になったことがありますか」について尋ねた結果、「よくある」、「ときどきある」、「たまにある」と答えた生徒はそれぞれ 10.2%、15.2%、45.4%になっている。これらの回答を合わせれば、何らかの頻度で「学校へ行くのが嫌になったこ

* お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
g0270318@edu.cc.ocha.ac.jp

とがある」と答えた生徒は全体の70.8%に達していることが分かる。また、本保と佐久川(1993)は1~3年生の中学生に意識調査をした結果、「学校を休みたくなるときがある」と回答したものは、全体の66.7%であったと報告している。不登校状態には陥っていないものの、欠席願望や登校回避願望がある児童生徒が高率に存在することが確認されている。

学校ぎらい感情の規定要因に関しては、学級社会での級友との人間関係の不安、トラブル(こじれや対立)、仲間はずれが一部の児童・生徒を不登校に陥らせているという指摘が多い。古市(1991)は小中学生の学校ぎらい感情を測定した結果、友人関係上の不適応が大きな影響を与えていることを明らかにした。また、永井・金生・太田・式場(1994)の約5000名の児童・生徒を対象にした調査では、学校で楽しく過ごしていないなどと否定的に答えた“学校ぎらい群”は学校が楽しいと肯定的に答えた“学校好き群”に比べ、明らかに友人関係を否定的に訴える割合が高いと報告され、“学校ぎらい”に関して、全般的に友人関係のゆがみや不適応に注目する必要性があると指摘されている。

一方、中国では、「厭学」(勉強嫌い、怠学)、「逃学」(学校をさぼる)、「輟学」(途中で退学する)、「失学」(貧困あるいは教育条件の不備などによる学齢児童が学校に行けない状態)のような言い方はあるが、日本で言われる「不登校」の概念に符合するものはない。中国で今まで子どもたちが心理的な原因で学校に行けないことが問題として取り上げられたことはなく、学校に対するネガティブな感情に関する研究もほとんど行われていない。しかし、Tao(1992)が指摘しているように、中国の子どもたちは児童期から学業成績への強い圧力の下で暮らし、厳しい競争に耐えねばならないという現状がある。このような状況で子どもたちは必ずしも学校に対してポジティブな感情を持ち、積極的な態度で学校に向かっていくものではない可能性が考えられる。学校へ行くことは当たりまえという中国の状況の中で、中学生たちは学校に欠席したい気持ちをどれくらい持っているか、また、学校忌避感のようなネガティブな感情はどんな要因により抑制されているかを検討していくことは、中学生の現状についてよりよく把握することができ、不登校の予防的側面からも意義があると考えられる。

本間(2000)は学校への登校や不登校の問題を考える時、子どもたちが学校に向かう力(なぜ学校に行くのか:登校理由)と学校から離れていく力(なぜ学校を回避するのか:欠席理由)を含めた包括的な視点から研究する必要があると指摘している。本研究においてもこの2つの観

点を同時に取り上げることとする。また、不登校の問題は、子どもと学校環境の相性という視点から、学校に子どもが適応しきれなかった問題として考えることができ(田上,2002)、児童・生徒がその所属する学校環境と調和していないことを意味する学校不適応とよばれることが多い(保坂,2000)。そこで本研究では、学校に向かう力と学校から離れていく力に加えて、学校そのものとの相性を検討するために、学校環境適応感尺度を用いて、中学生の学校適応状況を測ることを試みる。

以上の問題意識から本研究では、中国都市部の普通中学校の生徒を対象に、まず、学校に対する忌避的な感情に焦点を当て、中学生たちの欠席願望の実態を調べる。さらに、学校生活に関係する各側面として、学校に行く登校理由、学校を休む欠席理由、学校環境適応感を取り上げ、それらが学校忌避感にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象

中国上海市、北京市、河南省新郷市、甘肅省蘭州市の四都市の普通中学校計4校を選び、1~3年生の生徒、計1241名を対象に、学校忌避感などに関する質問紙調査を行った。回答に著しく不備のあるものを除き、最終的な分析対象は1230名(男子628名、女子589名、不明13名)であった(表1)。その後、教師に前年度の生徒の欠席状況についてのアンケートを実施した。

2. 調査内容

調査内容の作成にあたっては、異文化比較の可能性と適切性を考慮して、日本の先行研究から中国でも適用できると考えられる尺度を選択し、中国語に翻訳した。また、訳文は日本語堪能な中国人大学院生と中国語のできる日本人大学生にチェックしてもらい、言葉遣い、特にキーワードなどについて、翻訳における意味のずれを防ぐ努力をした。

①欠席願望 本間(2000)の登校回避願望の欠席願望を参考にし、「あなたは普段、どのくらい学校を休みたいと思いますか」の1項目を作成して、“強く思う”(4点)から“ぜんぜん思わない”(1点)までの4件法で調査した。

②学校忌避感尺度 古市(1997)が作成した学校享受感尺度(10項目)を反転項目版として使用した。反転項目を使用したのは、調査対象者に抵抗感を感じさせずに生徒の不登校傾向を測定するためである。各項目について、“よくあてはまる”(5点)から“まったくあて

TABLE 1 対象生徒の地域別、学年別、男女別構成 (人)

| | 上海 | | 北京 | | 新郷 | | 蘭州 | | 不明 | 合計 |
|-----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|------|
| | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | | |
| 1年生 | 67 | 76 | 46 | 46 | 63 | 43 | 90 | 80 | 3 | 514 |
| 2年生 | 50 | 47 | 47 | 44 | 62 | 65 | 84 | 75 | 4 | 478 |
| 3年生 | 44 | 38 | 41 | 34 | 34 | 41 | / | / | 6 | 238 |
| | 322 | | 258 | | 308 | | 329 | | 13 | 1230 |

はまらない” (1点) までの5件法で調査した。

③登校理由と欠席理由 本間 (2000) が作成した実際に学校に行っている理由 (16項目) および欠席を促進する理由 (17項目) の尺度を使用し、いずれも、“強く思う” (4点) から“ぜんぜん思わない” (1点) までの4件法で調査した。

④学校環境適応感尺度 内藤・浅川・高瀬・古川・小泉 (1987) の学校生活適応感尺度 (6下位尺度, 36項目からなる) より、「学習意欲」, 「友人関係」, 「教師関係」の3つの下位尺度の18項目を使用し、学校環境適応感尺度を作成した。各項目について、“よくあてはまる” (5点) から“まったくあてはまらない” (1点) までの5件法で調査した。

3. 調査手続き

2001年5～6月に、中学生を対象に無記名の質問紙法による学級単位の一斉調査を実施した。調査の実施に当たっては、学校の成績に一切関係がないことを書面で説明し、学年と性別のみの記入を求めた。回答が終わり次第担当教師にその場で回収してもらい、有効回答率は99%であった。また、同時期に、対象校の教師に「2000年度生徒欠席状況調査票」を実施した。

結 果

1. 教師対象のアンケート調査の結果

「2000年度生徒欠席状況調査票」をまとめた結果、4つの中学校では、病気や経済的な理由によるものを除き、年間30日以上長期欠席した不登校の生徒はいないという回答を得た。

2. 生徒対象の質問紙調査の結果

(1) 欠席願望の結果

「普段、どのぐらい学校を休みたいと思いますか」という質問項目において、4段階における回答状況は、「強く思う」生徒が11.20%、「少し思う」生徒が43.10%で、何らかの程度で学校を休みたいと思う生徒が半数以上の比率 (54.30%) に達している (TABLE 2)。

TABLE 2 欠席願望の回答

| | 強く 思う | 少し 思う | あまり 思わない | ぜんぜん 思わない | 計 |
|----|----------|----------|-------------|--------------|------|
| 人数 | 115 | 443 | 320 | 149 | 1027 |
| % | 11.20 | 43.10 | 31.20 | 14.50 | 100 |

(2) 学校忌避感尺度に関する因子分析

各項目の素点を5段階評定で得点が高いほど学校忌避感が強いことを示すように処理した。主因子法による因子分析を行った結果、先行研究と同じく1因子性が確認された。信頼性を検討するために α 係数を算出したところ.784が得られ、内的一貫性が確認された (TABLE 3)。

(3) 登校理由尺度に関する因子分析

登校理由について、因子負荷量の低い項目、複数の因子に高い負荷量を示した項目を除き、再度因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行い、4因子を抽出した (TABLE 4)。第1因子は“行くことが当然だから”、“勉強しなければならない”、“将来のため”、“高校に行くため”などからなり、学校に行くことに対する進路希望や規範意識を表しており、「進路・規範」因子とした。第2因子は“なんとなく”、“あたりまえになっているから”など学校に行くことが習慣化されていることを示していることから、「習慣」因子とした。第3因子について、“親に怒られるから”、“勉強が遅れるから”、“親がいけというから”という項目を反転処理し、「積極性」因子とした。最後に、第4因子は友人に関する2項目からなり、「友人の存在」とした。

(4) 欠席促進理由尺度に関する因子分析

登校理由尺度と同様に、欠席理由の因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行い、因子負荷量の低い3項目を除外した14項目で再度因子分析を行い、3因子を抽出した (TABLE 5)。

第1因子は、“出かけたところがある”、“疲れている”、“天気が悪い”、“朝寝坊した”、“眠たい”などからなり、学校外のことや身体・気分のような要素が中心となっているため、「学校外誘因」因子とした。第2

TABLE 3 学校忌避感尺度の因子パターン

| | | 共通性 |
|------------------------------------|-------------|------|
| # 学校が楽しいので、少しぐらい体の調子が悪くても学校に行きたい | .722 | .525 |
| # 私は学校に行くのが楽しみである | .676 | .458 |
| # 学校が楽しくて、一日あつという間に過ぎてしまう | .667 | .445 |
| # 学校では、楽しいことがたくさんある | .646 | .417 |
| # 私はこの学校が好きだ | .584 | .342 |
| # 今の学校が楽しいので、いつまでもこの学校にいられたらよいのと思う | .580 | .336 |
| 日曜日の夜、また明日から学校かと思うと気が重くなる | .540 | .292 |
| 学校にいるのがいやなので、授業が終わったらすぐに家に帰りたい | .503 | .253 |
| # 学校がなければ、毎日つまらないと思う | .499 | .249 |
| 学校では、いやなことばかりである | .423 | .179 |
| | 寄与率 | .350 |
| | α 係数 | .784 |

反転項目

TABLE 4 登校理由尺度の因子パターン（プロマックス回転後）と因子間相関

| | F1 | F2 | F3 | F4 | 共通性 |
|----------------------------------|-------|-------|-------|-------|------|
| 進路・規範 ($\alpha = .645$) | | | | | |
| 行くことが当然だから | .709 | .191 | .048 | .068 | .529 |
| 勉強しなければならないから | .698 | .235 | .016 | -.079 | .524 |
| 将来のため | .653 | -.195 | -.029 | .025 | .475 |
| 高校に行くため | .603 | -.022 | -.356 | -.009 | .496 |
| 勉強したいから | .522 | -.315 | .260 | -.032 | .506 |
| 習慣 ($\alpha = .544$) | | | | | |
| なんとなく | -.077 | .769 | .037 | -.079 | .575 |
| あたりまえになっているから | .217 | .663 | -.245 | -.089 | .616 |
| 家にいてもつまらないから | .138 | .547 | .136 | .399 | .485 |
| 積極性 ($\alpha = .565$) | | | | | |
| # 親に怒られるから | .093 | -.162 | .689 | -.100 | .625 |
| # 勉強が遅れるから | -.279 | .242 | .685 | -.006 | .519 |
| # 親がいきというから | .092 | -.285 | .631 | .011 | .597 |
| 友人の存在 ($\alpha = .433$) | | | | | |
| 友だちと会えるから | .073 | .018 | .033 | .821 | .673 |
| 好きな人がいるから | -.125 | -.086 | -.184 | .687 | .556 |
| | 累積寄与率 | .217 | .388 | .479 | .552 |
| | F1 | -.048 | -.026 | .015 | |
| | 因子間相関 | F2 | -.315 | .154 | |
| | | F3 | | -.233 | |

反転項目

因子は、“いじめる子がいる”、“友だちとけんかした”、“宿題や提出物ができていない”など学校生活に関する対人関係や学業のつまづきを表す項目からなり、「学校内不安」因子とした。第3因子は、“テストがある”、“きれいな授業がある”からなり、「学習ストレス」因子とした。

(5) 学校環境適応感尺度に関する因子分析

学校環境適応感尺度 18 項目に対して、複数の因子に高い負荷量を示した項目を省き、また項目の内容を考慮して、最終的に 9 項目で 3 因子を抽出した (TABLE

6)。

第1因子は、“何でも相談できる先生がいる”、“この学校の先生と気軽に話せる”、“この学校の先生を信頼している”、“先生と話す機会を持とうとしている”など、教師との適応関係を主に表す項目からなり、「教師への適応」因子とした。第2因子は、“ある程度勉強ができるほうである”、“授業をよく理解している”、“勉強の目標を持って努力している”など、学習・勉強面における適応に関するものであることから、「学習意欲」因子とした。さらに、第3因子は“悩みを話せる

TABLE 5 欠席理由尺度の因子パターン (プロマックス回転後) と因子間相関

| | F1 | F2 | F3 | 共通性 |
|-----------------------------------|-------|-------|-------|------|
| 学校外誘因 ($\alpha = .872$) | | | | |
| 友だちといっしょに休もうと言っている | .752 | .084 | -.244 | .529 |
| 出かけたところがある | .742 | .031 | .039 | .603 |
| 疲れている | .727 | -.146 | .172 | .567 |
| とても天気が悪い | .676 | .222 | -.227 | .532 |
| 勉強の科目が多い | .672 | -.035 | .227 | .613 |
| なんとなく行きたくない | .670 | -.152 | .220 | .527 |
| 朝寝坊した | .524 | .250 | .007 | .472 |
| ねむたい | .476 | .208 | .126 | .460 |
| 少し頭やお腹が痛い | .459 | .208 | .148 | .458 |
| 学校内不安 ($\alpha = .764$) | | | | |
| いじめる子がいる | -.096 | .895 | -.005 | .720 |
| 友だちとけんかした | .109 | .754 | .056 | .704 |
| 宿題や提出物ができていない | .138 | .572 | .220 | .596 |
| 学習ストレス ($\alpha = .685$) | | | | |
| テストがあるとき | -.057 | .067 | .839 | .705 |
| きらいな授業がある | .030 | .069 | .789 | .692 |
| 累積寄与率 | .433 | .513 | .584 | |
| 因子間相関 | F1 | .504 | .452 | |
| | F2 | | .371 | |

TABLE 6 学校環境適応感尺度の因子パターン (プロマックス回転後) と因子間相関

| | F1 | F2 | F3 | 共通性 |
|-----------------------------------|-------|-------|-------|------|
| 教師への適応 ($\alpha = .703$) | | | | |
| 何でも相談できる先生がいる | .805 | .004 | -.020 | .640 |
| この学校の先生と気軽に話せる | .727 | -.035 | .104 | .569 |
| この学校の先生を信頼している | .684 | .096 | .063 | .564 |
| 先生と話す機会を持つようとしている | .677 | -.019 | -.137 | .407 |
| 学習意欲 ($\alpha = .653$) | | | | |
| ある程度勉強できるほうである | -.085 | .871 | -.005 | .707 |
| 授業をよく理解している | .016 | .822 | -.030 | .671 |
| 勉強の目標を持って努力している | .241 | .504 | .069 | .441 |
| 友人への適応 ($\alpha = .593$) | | | | |
| 悩みなど話せる友人がいる | .005 | -.084 | .880 | .740 |
| 楽しい友人関係を持っている | -.037 | .102 | .801 | .680 |
| 累積寄与率 | .355 | .482 | .602 | |
| 因子間相関 | F1 | .379 | .331 | |
| | F2 | | .300 | |

友人がいる”，“楽しい友人関係を持っている” という友人関係面で適応を表す2項目からなり、「友人への適応」因子とした。

(6) 各尺度の学年差，性差

TABLE 7 は学校忌避感尺度および各下位尺度の学年別，性別得点と，学年×性別の2要因分散分析結果を示したものである。

学年差については，登校理由の下位尺度である「習慣」($F(2,1204)=6.57, p<.01$)，「積極性」($F(2,1204)=4.59,$

$p<.05$)，「友人の存在」($F(2,1208)=6.38, p<.01$) と，欠席理由の下位尺度である「学校外誘因」($F(2,1172)=7.95, p<.001$)，学校環境適応感の下位尺度である「教師への適応」($F(2,1203)=5.49, p<.01$)，「学習意欲」($F(2,1195)=3.48, p<.05$) において有意な主効果が認められた。

「習慣」，「友人の存在」，「学校外誘因」では，いずれも学年が上がるにつれ得点が高くなる傾向が示された。また，「積極性」，「教師への適応」，「学習意欲」におい

TABLE 7 各因子の学年別・性別平均値と分散分析の結果

| | 1年生 | | 2年生 | | 3年生 | | 学年 | F値 | 交互作用 |
|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|---------|-------|
| | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | | | |
| 学校忌避感 | 2.50(.72) | 2.38(.64) | 2.51(.64) | 2.42(.62) | 2.38(.68) | 2.45(.63) | n.s. | n.s. | n.s. |
| 登校理由 | | | | | | | | | |
| 進路・規範 | 3.28(.56) | 3.29(.52) | 3.25(.53) | 3.32(.48) | 3.38(.51) | 3.33(.47) | n.s. | n.s. | n.s. |
| 習慣 | 2.33(.72) | 2.31(.69) | 2.36(.70) | 2.38(.68) | 2.51(.68) | 2.53(.62) | 6.57** | n.s. | n.s. |
| 積極性 | 2.72(.77) | 2.93(.71) | 2.66(.69) | 2.70(.70) | 2.76(.77) | 2.76(.73) | 4.59* | 5.91* | n.s. |
| 友人の存在 | 2.72(.80) | 2.59(.79) | 2.76(.79) | 2.76(.81) | 3.02(.79) | 2.74(.77) | 6.38** | 5.62* | n.s. |
| 欠席理由 | | | | | | | | | |
| 学校外誘因 | 1.84(.76) | 1.68(.58) | 1.89(.69) | 1.91(.70) | 1.90(.77) | 2.01(.66) | 7.95*** | n.s. | 3.59* |
| 学校内不安 | 1.99(.89) | 1.78(.74) | 1.90(.81) | 1.85(.72) | 1.82(.78) | 1.88(.79) | n.s. | n.s. | n.s. |
| 学習ストレス | 2.28(.88) | 2.27(.77) | 2.33(.83) | 2.35(.85) | 2.29(.83) | 2.38(.86) | n.s. | n.s. | n.s. |
| 学校環境適応感 | | | | | | | | | |
| 教師への適応 | 3.42(.91) | 3.59(.81) | 3.32(.90) | 3.34(.88) | 3.52(.89) | 3.46(.86) | 5.49** | n.s. | n.s. |
| 学習意欲 | 3.79(.84) | 3.83(.72) | 3.70(.81) | 3.73(.72) | 3.91(.69) | 3.81(.64) | 3.48* | n.s. | n.s. |
| 友人への適応 | 4.08(.93) | 4.24(.76) | 4.08(.86) | 4.29(.75) | 4.27(.68) | 4.29(.67) | n.s. | 10.53** | n.s. |

()内は標準偏差。* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

ては、2年生で一度下がって、3年生になると再び上昇する傾向が見られた。さらに、「学校外誘因」において交互作用が認められ、Tukey法による多重比較を行ったところ、男子では学年差は認められず、女子の1年生の得点が他の学年に比べて最も低かった。

性差では、登校理由の下位尺度である「積極性」($F(1,1204)=5.91, p < .05$), 「友人の存在」($F(1,1208)=5.62, p < .05$), 学校環境適応感の下位尺度である「友人への適応」($F(1,1212)=10.53, p < .01$)に有意差が認められた。「積極性」と「友人への適応」とも、男子より女子のほうが有意に高い傾向が見られた。

(7) 学校忌避感に影響を及ぼす要因に関する検討

どのような要因が中国の中学生の学校忌避感に影響を及ぼすのかを検討するために、「登校理由」, 「欠席理由」, 「学校環境適応感」の各下位尺度得点を独立変数, 「学校忌避感尺度」を従属変数, とする重回帰分析を行った($R = .645, R^2 = .416, F(10,1037) = 73.92, p < .001$)。その結果をTABLE 8に示した。独立変数間で比較的強い相関がある変数は「学習ストレス」と「学校外誘因」($r = .50$), 「学習ストレス」と「学校内不安」($r = .53$)であり, 多重共線性の影響に留意する必要があると考えられ, 今後より詳細なモデル化を試みる余地がある。

中国の中学生の「学校忌避感」は全体的に「教師への適応」($\beta = -.313$), 「積極性」($\beta = -.193$), 「進路・規範」($\beta = -.146$), 「学習意欲」($\beta = -.103$)などが学校忌避感との間に負の関連がみられ, 一方, 「学校忌避感」と正の関連を示した要因は, 「学校外誘因」($\beta = .174$)と「学習ストレス」($\beta = .088$)であった。

TABLE 8 「学校忌避感」に影響を及ぼす要因：重回帰分析の結果

| 独立変数 | β |
|----------------|----------|
| 登校理由 | |
| 進路・規範 | -.146*** |
| 習慣 | .059 |
| 積極性 | -.193*** |
| 友人の存在 | -.075** |
| 欠席理由 | |
| 学校外誘因 | .174*** |
| 学校内不安 | -.008 |
| 学習ストレス | .088*** |
| 学校環境適応感 | |
| 教師への適応 | -.313*** |
| 学習意欲 | -.103*** |
| 友人への適応 | -.037 |
| R^2 | .416 |

** $p < .01$. *** $p < .001$.

考 察

本研究の目的は, 中国都市部中学生の欠席願望の実態を調べ, 学校忌避感に影響を及ぼす要因について検討することであった。

まず, 中学生の欠席願望の実態に関しては, 何らかの程度で学校を休みたいというような欠席願望を持っている者が, 全体の半数以上を占めていることが明らかとなった。一方, 教師を対象に実施した「2000年度生徒欠席状況調査票」の結果をみると, 四都市の4つの中学校では, いずれも不登校に陥った生徒はいないと報告された¹⁾。これらの結果から, 学校に行きたくないという欠席願望を持っていても, 中国の中学生たち

は学校を休まず、続けて登校していることが明らかとなった。

また、学校忌避感に影響を及ぼす要因を究明するために、学校忌避感を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、「教師への適応」が中国の中学生の学校忌避感を抑制するのに最も重要であると確認された。日本の先行研究で確認された友人関係上の不適応が児童・生徒の学校忌避感の重要な規定要因となっているという結果（古市, 1991; 1997; 古市・国房, 1998）とは対照的に、中国の中学生たちは学校生活において、友人との関係への適応よりも、教師との関係への適応が学校忌避感により強い影響を与えていることが本研究で新たに見出された。中学生の学校忌避感に影響する要因として、対人関係の面において、日中両国の間で大きく異なっていることが分かった。

その他、登校理由、欠席理由、学校環境適応感、学校忌避感の各尺度について学年差・性差も検討した。学年差に関しては、学年が上がるにつれ、登校理由の下位尺度である「習慣」、「友人の存在」、欠席理由の下位尺度である「学校外誘因」の得点が高くなる傾向が示されている。即ち、学年が上がるに従って、進学によるストレスや長時間勉強することで、身体的、精神的に疲れてくることが考えられ、惰性が生じ、習慣的に通学する生徒が増加する一方、欠席の理由として、学校外誘因である疲れや体の不調といった理由を訴えることも多くなるかもしれない。また、「友人の存在」は学年が上がることで高くなり、友人はますます重要になってくることは、青年期における一つの特徴としてよく知られている。

一方、登校理由の下位尺度である「積極性」、学校環境適応感の下位尺度である「教師への適応」と「学習意欲」においては、男女とも2年生で一度下がり、3年生になると再び上昇する。このような結果は、中国の一連の研究（程・曾, 2000; 高・鄒・劉, 2002; 李・鈕・鄒, 2000; 沃・林・馬・李, 2001; 陽・王・董, 2000）でも同様の傾向が確認されている。中学校の2年目は子どもたちにとって「分化」と「転換」（心身の成長とともに、進路や将来に対してより明確に認識できるようになり、学業成績や特長によって、選択肢の差異も生じる）の時期でもあり、よい高校に入学できるかどうかは2年生の時点で学業的に良い

基礎が作れるかどうかに関わる。教師や親の期待、学業自体およびその他のことに起因するストレスが増大するため、中学校2年生の無力感、対人不安などが最も高くなるとみられる。このように、さまざまなストレスを最も強く感じる2年生は学習意欲が低下し、登校することに対して消極的になる傾向がみられる。また仲間との関係と異なり、大人を代表する教師との関係も一時期悪くなりやすいと考えられる。3年生に上がると得点が再び上昇することから、中学校卒業を目前にし、高校進学試験を控えるため、将来の進路を決定する大事な時期を迎えるともいえるので、登校に対する積極性、学習を頑張らなければならないという意欲が高まると考えられる。また、そういう変化の過程において、3年生にとって進学することに一番力になってくれる教師との間により関係を結ぶことが大事であり、教師との関係も改善する傾向にみられる。

また、性差に注目すると、「友人の存在」では男子の得点は女子より高いが、「友人への適応」では、男子より女子のほうが高かった。男子にとって、学校でいっしょに活動できる仲間の存在自体が重要であるようにみえる。一方、女子の場合、友人といえる人がいるだけでは満足できず、悩みを打ち明けられる友人、友人とよい関係を持つことなど、友人に対してより深いつながりや交流を求める傾向があるのではないかと思われる。

ついで、学校忌避感については、中国の中学生では有意な学年差・性差はいずれもみられなかった。日本の先行研究で確認された学年が上がるに従って学校ぎらいは増加する（永井・金生・太田・式場, 1994）、あるいは、女子より男子のほうの学校ぎらい感情が強い（古市, 1991）などの傾向と異なる結果が得られた。このことから、中国の中学生たちは学年や性別と関係なく、同程度の学校忌避感を持っていることが示唆された。

本研究の結果から、中国では多くの子どもたちが欠席願望を持っていても、休むことなく学校へ通っていることが分かった。森田（1991）は子どもたちを学校に結びつける力（引力）が存在して、はじめて登校は可能になると指摘している。学校を休むことなく学校へ通っているのは、子どもたちを学校へ結びつける引力が、ストレスなど学校から離そうとする力（斥力）を上回っているからであると考えられる。では、欠席願望を持ちながらも、不登校に陥らず登校し続ける中国の中学生たちにとって、彼らを学校に向かわせる力は何であろうか。この問題を考える時、中国社会の文化的背景を考慮する必要があると思われる。

¹ 日本で教室に行くことの出来ない生徒を「保健室登校」や「別室登校」させ、出席扱いとするようなやり方は中国の学校には存在していない。また、今回の調査に協力してくれた学校（いずれも中高一貫性校）に問い合わせたところ、中学生も高校生も退学者はいないと報告された。

1300年以上続いた官吏を任用する中国の国家試験である「科挙」制度は、当時の教育を左右しただけではなく、後世にも強い影響を与えている。中国の文化的価値観において、教育は個人達成に極めて重要な意味を持ち、子どもたちは勉強することと高い成績を取ることとは自己の完成のための大事な形であると教えられ、好みや厳しい学習条件にもかかわらず、熱心に勉強して、継続的に自分を高めるように動機付けられる (Chen & Uttal, 1988; Li, 2002; Tweed & Lehman, 2002)。現在の中国社会では、高い教育経験を得ることが、より高い社会的地位を獲得する唯一の手段であるという考えは依然として広く存在している。1980年代から正式に実行され始めた「一人っ子」政策は、“英才教育”に拍車をかけることになっている。両親や祖父母が一人っ子に惜しむことなく愛情を注ぎ、子どもの養育費や教育費は都市部家庭で最大の出費となっている。中国の子どもたちは小さい頃から激しい競争の渦に巻き込まれていくことは確実である。

上昇志向の強い文化背景がある一方、大学院などを含む高等教育機関の在学者の人口千人あたりの人数は、中国では4.6人である(2000年中国統計年鑑)。有限の進学チャンスしか提供できない現状において、激しい競争を勝ち抜けるために、中国の親も子どもも進学することに対して情熱的であるといえる。このような情熱は生徒たちを学校に向かわせる大きな推進力となり、子どもたちを学校に繋ぎとめているのではないと思われる。このように、中国の中学生は学校を休みたいという気持ちを持っていても、将来のために我慢し、学校を休まず登校し続けることができるようになっていると推測できる。

一方、学校は教育を受ける最も重要な場所として、一番大事な役割を担っているのは教師である。古くから教師は尊敬されるべき、礼儀的に付き合うべき存在であるという認識は中国の文化の一部として広く受け入れられている。Chen & Uttal (1988)の調査によると、66%の中国の母親は子どもの学業成績に対する影響は、親に比べて教師がより重要な役目を担っていると考えており、中国の親は教師の役割を極めて重要視していることが示されている。学校忌避感の抑制要因として、教師との関係への適応は友人関係以上に重要であることの理由の一つであると考えられる。

以上のように、本研究では中国都市部中学生の欠席願望と学校忌避感に影響する要因に焦点を当てて検討した。中学生たちは欠席願望を持っていながら学校を休まず登校し、「不登校」に陥るまでには至っていない

ことが分かったが、厳しい受験戦争や就職難の中で、生徒たちの心理的状況に目を向けることが重要であり、特に学校適応に問題を抱えている生徒に対して、教師側の受容と理解が必要であり、教師と安定した信頼関係を築くことができれば、生徒たちは学校生活をより楽しく送ることができ、今後不登校問題の発生を予防することに役に立つと考えられる。

最後に、今回の調査では疾病など身体的理由で長期的に学校を休む生徒の中に、学校不適応が原因で欠席した生徒がいたかどうかは特定できなかった。さらに詳しく調べる必要がある。また、今回の研究では中国の中学生の学校忌避感を抑制する要因として、教師関係への適応は友人関係よりも重要であることが確認された。従って、教師関係や友人関係といった対人関係の面における日中両国の中学生たちの認識の違いについて、今後量的な調査以外に、インタビューなどの質的研究法を導入し、より詳細に検討することが必要である。

引用文献

- Chen, C., & Uttal, D. H. 1988 Cultural values, parents' beliefs, and children's achievement in the United States and China. *Human Development*, **31**, 351-358.
- 程 楽華・曾 細花 2000 青少年学生自我意識發展的研究 心理發展与教育, **16**, 12-18. (Cheng, L. H., & Zeng, X. H. 2000 Research on the development of self-consciousness in adolescence. *Psychological Development and Education*, **16**, 12-18.)
- 古市裕一 1991 小中学生の学校ぎらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, **24**, 123-127. (Furuichi, Y. 1991 Factors contributing to children's unwillingness to attend school. *Japanese Journal of Counseling Science*, **24**, 123-127.)
- 古市裕一 1997 登校忌避的感情とその規定要因一類型別の検討一 岡山大学教育学部研究集録, **106**, 165-172.
- 古市裕一・国房京子 1998 小学生の学校ぎらい感情と教師の指導態度 岡山大学教育学部研究集録, **107**, 159-167.
- 高 琨・鄒 泓・劉 艶 2002 初中生社会交往策略的發展及其与同伴接納的關係 心理發展与教育, **18**(4), 41-46. (Gao, K., Zou, H., & Liu, Y. 2002 The developmental characteristics of

- junior high school students' social strategies and peer acceptance. *Psychological Development and Education*, 18(4), 41-46.)
- 保坂 亨 2000 学校を欠席する子どもたち 東京大学出版会
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41. (Honma, T. 2000 Changes in junior high school students' views of school attendance and factors controlling their absence and desire for absence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 32-41.)
- 稲村 博 1994 不登校の研究 新曜社
- 伊藤美奈子 2001 学童期・思春期：不登校 下山晴彦 丹野義彦 (編) 臨床心理学V 東京大学出版会
- 伊藤美奈子 2002 スクールカウンセラーの仕事 岩波新書
- Li, J. 2002 A cultural model of learning : Chinese "Heart and mind for wanting to learn". *Journal of Cross-cultural Psychology*, 33, 248-269.
- 李文道・鈕麗麗・鄒泓 2000 中学生的压力事件, 人格特点对压力应对的影响 心理发展与教育, 16(4), 8-13. (Li, W. D., Niu, L. L., & Zou, H. 2000 The influence of stressful life events, personality characteristics on the middle school students' coping styles. *Psychological Development and Education*, 16(4), 8-13.)
- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- 本保恭子・佐久川肇 1993 中学生の不登校願望に関する意識調査 小児の精神と神経, 33, 283-290. (Motoyasu, K., & Sakugawa, H. 1993 The questionnaire investigation concerning junior high school students' hope of school refusal. *Psychiatria et Neurologia Paediatrica Japonica*, 33, 283-290.)
- 文部省 2005 平成 15 年度学校基本調査報告書 初等教育機関・専修学校・各種学校編
- 文部省 2005 平成 15 年度学校基本調査報告書 高等教育機関編
- 永井洋子・金生由紀子・太田昌孝・式場典子 1994 “学校嫌い”からみた思春期の精神保健 児童青年精神医学とその近接領域, 35, 272-285. (Nagai, Y., Kano, Y., Ohta, M., & Shikiba, N. 1994 Mental health of adolescent students with negative feelings towards school. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 35, 272-285.)
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-146. (Naito, Y., Asakawa, K., Takase, K., Kogawa, M., & Koizumi, R. 1987 A school adaptation scale for high school students. *Hyogo University of Teacher Education Journal*, 7, 135-146.)
- 田上不二夫 2002 不登校 楡木満生編 スクールカウンセリングの基礎知識 新書館
- Tao Kuo-Tai 1992 中国における児童精神医学の実際 児童青年精神医学とその近接領域, 33(5), 52-62. (招待講演)
- Tweed, R. G., & Lehman, D. R. 2002 Learning considered within a cultural context : Confucian and Socratic approaches. *American Psychologist*, 57(2), 89-99.
- 沃建中・林崇徳・馬紅中・李峰 2001 中学生人際関係発展特点的研究 心理发展与教育, 17(3), 9-15. (Wo, J. Z., Lin, C. D., Ma, H. Z., & Li, F. 2001 A study on the development characteristics of adolescents' interpersonal relations. *Psychological Development and Education*, 17(3), 9-15.)
- 陽徳華・王耘・董奇 2000 初中生的抑郁与焦虑：結構与発展特点 心理发展与教育, 16(3), 12-17. (Yang, D. H., Wang, Y., & Dong, Q. 2000 Depression and anxiety of secondary school students : Structure and development. *Psychological Development and Education*, 16(3), 12-17.)
- 2000年中国統計年鑑 2001 中国統計出版社

謝 辞

本論文はお茶の水女子大学大学院人間文化研究科に提出した修士論文(2001年度)のデータの一部を再分析し, 加筆・修正したものです。本論文の作成にあたり, 丁寧なご指導をいただきました伊藤美奈子先生(慶応大学), 内田伸子先生(お茶の水女子大学), 無藤隆先生(白梅女子大学), 大塚雄作先生(京都大学)に厚く御礼申し上げます。また, 調査にご協力をくださいました中学校の先生方, 生徒の皆さんにも心より感謝申し上げます。

(2003.9.1 受稿, '05.11.14 受理)

Factors That Inhibit Chinese Junior High School Students' Unwillingness to Attend School

ZHAI YUHUA (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SCIENCES, OCHANOMIZU UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2006, 54, 233-242

The purpose of the present study was to investigate students' wish to be absent from school and factors related to the unwillingness to attend school among junior high school students in China. A questionnaire was completed by 1,230 junior high school students (grades 7-9), including 630 males and 593 females (plus 13 of unidentified gender) in Shanghai, Beijing, Xinxiang, and Lanzhou, People's Republic of China. The major results were as follows: More than half the students wanted to be absent from school, although none of them had officially been reported as non-attending. Adjustment to teachers was reported to be a more important determinant than adjustment to peers in inhibiting the students' unwillingness to attend school.

Key Words: students' wish to be absent from school, unwillingness to attend school, adjustment to teachers, junior high school students in China